

ウミコオロギ

ウミコオロギ *Caconemobius sazanami*

別名ナギサスズという。また、学名には漣（さざなみ：水面の小さな波）とつけられていて“海”という特徴を重視して命名されている。翅が無くして触角が異様に長い、へんてこな見た目コオロギだ。ただしこれも、海辺で暮らすには必要な形なのだろう。



拡大すると細かい毛がたくさん生えていた。水をはじく効果があるのだろうか。



護岸された川岸にいたウミコオロギ。江戸川区の川にいるなら学校横の横十間川にいてもおかしくない。

お久しぶりです、下山田です。だいぶ間が空いてしまったが、皆さん覚えているでしょうか？長らく待っていてくれた方、お待たせしました。さて、雑談はこのくらいにして本題だ。「ウミコオロギ」と聞いてピンとくる人はいるだろうか？「ウミ」とつくが、ウミクワガタ（いきもの記 Vol.14参照）のような海の生物ではなく陸の昆虫だ。バツ目コオロギ科ヤチスズ亜科（分類によってはヒバリモドキ科）に属している。主な生息地は海岸の岩場や石の下、テトラポッドのようだ。東京はわからなかったが、お隣の神奈川では絶滅危惧I類の虫だ。そんな昆虫がなんと東京の地元の川（江戸川区）、しかも長さ1.5キロメートルほどで、コンクリートで川岸が舗装されて分断されている短い川にいたのだ（少し前の話だが、9月に夜に魚をとりに行ったら見つけたのだ）。見た目はカマドウマ（トイレによく出る脚の長いコオロギ。不快害虫第3位らしい）にととても似ている1センチほどの黒いコオロギだ。

このコオロギ、海という名前は伊達ではないようである。どうやら海の上に浮いたり跳ねたり、水の中に潜ったりできるようだ。また、昼はあまり見かけないので基本的に夜行性のようである。ということで、目は小さくなり代わりに触角がものすごく発達している。また、噂通り水の上を跳ねるところを観察できた。これは足の裏に毛が密に生えているからと思われる。そして脚力がとんでもなく強い。そんなもんだから、捕まえても網から逃げ出しケースに入れるのも一苦労だった。

まだ私は潜水する所は見えていないのだが、一度、このコオロギを持ち帰った時にコオロギが水浸しになって動かなくなっていたことがあった（死んでしまったかと思った）。でも、水から出してしばらくしたらぴんぴんしていた。どこのアメリカアカガエルさん（脳を含む体の60%を凍らせて冬眠するカエル。一時的に血糖値を数十倍にすることで完全には凍らなくなるらしい）かい！と思った。詳しいことはわからないが、潜水というより仮死状態に近いと考えられる。

また、この川での分布がコンクリートで川岸が舗装されていないところが多かった。だがお互いに距離は100m以上離れているところもある。それに、前から川には夜に行っていたが、このコオロギは最近まで見つからなかった。これらのことから、どこから流されてきたとも推測できる。

話は変わるが、このコオロギを飼育してみることにした。そうしたらとんでもない曲者だった（※あくまで個人の感想です）。まず、砂だとソワソワと動き回って落ち着かない（採って来たばかりだったから？）。さらに塩水があるところにずっといる。試しにそこから離してみたのだが戻ってきた。もしかしたら塩水が欠かせないのかもしれない。そして最後に餌だ。インターネットなどには打ち上げられた動物の死骸などを食べると書いてあった。それにならって煮干やお刺身、人工飼料に虫の死骸（トンボや腐ってはいない）などを入れておいたが食べていなかった。結局お亡くなりになってしまった（コオロギには申し訳ない）。ということで、ひたすら野外で餌を食べる姿を見ようと探したのだが、このコオロギが食べていたのはフナムシだけだった。フナムシ専食なのか私の飼育ミスなのか。なにせ詳しく調査が行われていなさそうなのだ。ということもあり、このコオロギのことが書かれているものが全然見つからない。だから私も全然わからないのだ。試す機会があれば色々試してみたい。

最後にちょっとした小話だ。前にキバラハキリバチの話をしたのを覚えているだろうか（Vol.37参照）。あの後も何匹も羽化し放したのだが、少ししてそのうちの1匹が、育ててくれてありがとうとでも言うように挨拶しにきた。親バチが巣を作っていた公園でだ（網を出した時にはもういなくなっていた。ということは私が発した“何か”を感知した？）。もしかしたら虫の知らせや鶴の恩返しは本当にあるのかもしれない。